



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	木造教会建築の礼拝室天井高確保の空間演出について : 日本基督教会遠軽教会と元田稔の教会建築を対象として
Author(s)	川島, 洋一
Citation	基督教学, 40, 27-31
Issue Date	2005-06-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46687
Type	journal article
File Information	40_27-31.pdf



ルトガル国王の富を増大させることが、宣教師たちの果たすべき「奉公」でもあった。

おわりに

イエズス会は右に見た各種の財源を基礎的経済構造として、教団運営に編入して行ったのであるが、この財源の確保という地上の問題をめぐって、イエズス会内部では、主要な布教地同士の軋轢が表面化することとなった。例えばゴア、コチン、マラッカでは日本の資金が不正流用され、この四布教地間の関係は悪化し、清貧に関する『イエズス会会憲』の規定の空洞化、という深刻な内部矛盾を抱えることとなったのであった。

(本稿は平成十六年度「科学研究費補助金」による研究成果の一部である)

研究発表要旨

木造教会建築の礼拝室天井高 確保の空間演出について

日本基督教会遠軽教会と元田稔の教会建築を対象として

川 島 洋 一

はじめに

本研究は近代建築史の中で登場したキリスト教の教会建築で中心的な空間である礼拝室の形態的特徴について考察し、日本社会でのキリスト教建築史の一側面を明らかにする事が目的である。

本稿では礼拝室の断面形に注目し、特に天井高確保によって礼拝行為を包む効果的空間演出のための構造的特徴について、現存する昭和初期木造建築の日本基督教会「遠軽教会」と、また昭和二〇年代以降の教会建築を手がけた元田稔の作品を対象として考察した。

一、遠軽教会の沿革と教会建築の特徴

一・一、沿革と教会建築

遠軽教会は明治二九年結成の北海道同志教育会（以下教育会）での北海道開拓移民を起源とし、未開地湧別川流域三千町歩の農耕地を基本財産としてキリスト教大学設立の構想を基に入植し、この意志を継承した「北見青年会」を設立し同三十七年に会館を建てた。また屯田兵屋一部を初期会堂として集会場と牧師館とし、木造平家切妻屋根平入、田の字型平面での部屋と台所、便所、浴室を配置し床面積約二〇坪程度の建物であった。

その後ピアソン宣教師援助により同三八年伝道教会設立、翌年専任牧師を迎えて現遠軽教会設立の基礎が築かれた。同四五年には本格的な会堂を建築し、木造平家切妻屋根妻入で棟上に方形屋根の塔が置かれ、妻側正面玄関棟左右には上部アーチ縦長上げ下げ窓があり、教会建築としての主張が外観に現われていた。棟梁は山形県出身の信徒鏡九郎兵衛、建築費用は信徒の薄荷共同耕作によって捻出された。平面は長方形単廊式礼拝室で講壇と玄関は外部凸で床面積は約四八坪の簡素な礼拝機能のみ

の会堂であった。そして教会会計的にもミッション依存から信徒献金等による自給教会となり大正十一年には教会設立へと発展し、同教派で当管内での純農村型教会として最も早く設立された。

その後昭和六年にはこの会堂が消失（同六年）したが半年足らずの短期間に現会堂（写真1）を再建し、設計同教派札幌北一条教会会員池畑敏行、施工林栄次郎により建設され、木造二階建切妻屋根妻入塔屋付ゴシック調の均整の取れた外観の会堂となった。延床面積約六四坪で単廊式礼拝室と集会室があり教会建築としての機能が旧会堂よりも整った建物である。しかし昭和初期の不況とキリスト教主義が薄れ伝道は徐々に困難となり、更に軍色が強まり同一六年成立の宗教団体法により各教派は日本基督教団に統合され、遠軽教会も教団所属となったが、戦後法律解除で現教派に復帰した。教会建築は同五〇年代に水廻空間と牧師館への通用口が増築されたのみで八〇年近く経過した今日でも建設時の外観が保たれ地域のシンボルとなっている。

一・二・現教会建築のデザインと礼拝室の特徴

昭和初期建築の現木造教会建築としての特徴としては、外観のゴシック調デザイン、木の葉を基本とした窓、扉、講壇廻りの意匠で統一したデザインが用いられ、また内部の礼拝室は水平梁がなく斜め天井によって高さを確保して、道内に現存する同種の建物としては特異な構造が採用されていた。即ち礼拝室空間が斜め梁により左右から高く持ち上げての斜め天井で、横断する水平梁と水平天井の通常の空間ではなく天井をより高く持ち上げる空間演出の構造であった(図版1左)。

二・元田稔の礼拝室演出と現カナダでの教会建築

二・一・建築家元田稔と礼拝室天井高確保技術

戦後昭和二〇年代から同四〇年代に渡って日本聖公会の教会建築設計を多数設計した建築家元田稔の作品にも、これまでの研究³⁾でこの斜め梁による礼拝室空間の構造を確認している。父親は明治時代の日本聖公会東京教区初代主教であり、大正時代後期に旧東京帝大で建築を学び戦後の教会建築設計の第一人者である。

元田の礼拝室小屋組みは水平梁の採用は少なく、いかに天井を高く持ち上げるかであって、初期は斜め梁上部に水平材を補強する構造であった。その後水平材を除去し数本の束で上下結合するダブルの斜め梁を桁から棟木に持ち上げる手法(図版1中)が見られ、そして遠軽教会と同様な途中の束を省略し棟部分のみに三本の束を用いて斜め梁を菱型状に結合した構造へと変遷。

二・二・開拓初期アメリカ大陸での事例(文献調査¹⁾)

さてこの手法での教会建築の状況について文献調査を実施したが、一八九〇〜一九〇〇年代現カナダの西海岸ブリテッシュコロンビア州北部の一部地域に、この構造が採用(図版1右)されていることが明らかになった。掲載してあった写真資料によると、元田による手法と同様に三種類の木造小屋組みが採用されていた。

三、天井高確保の木造建築技術

礼拝室はその機能により天井をより高くする事はキリスト教伝来の明治時代から試みられているが、その多くは水平材梁による天井造作ある意は梁が横断する吹き抜け空間になっている事を考えると、本稿で明らかにした遠軽教会での特殊な構造は、北海道宣教に関与したピアソン宣教師がこの手法をもたらし、遠軽教会設計者である池畑に伝わったと推察でき、またピアソンがこの技術を知り得たのは約一世紀前のアメリカ大陸西部開拓時に使用されたこの特殊な構造を当時の文献で、あるいは直接同様な教会建築に接しての事であったとも考えられる。

おわりに

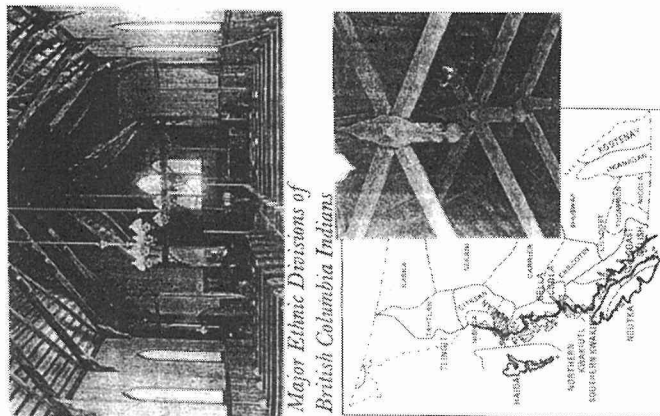
建設から一世紀をむかえようとする現遠軽教会の木造礼拝室の天井高確保の特殊な構造と元田稔の作品、そしてカナダで見られた同様な構造を明らかに出来たが、今後はこの事例三棟の歴史的な関係について明らかにする必要がある。

註

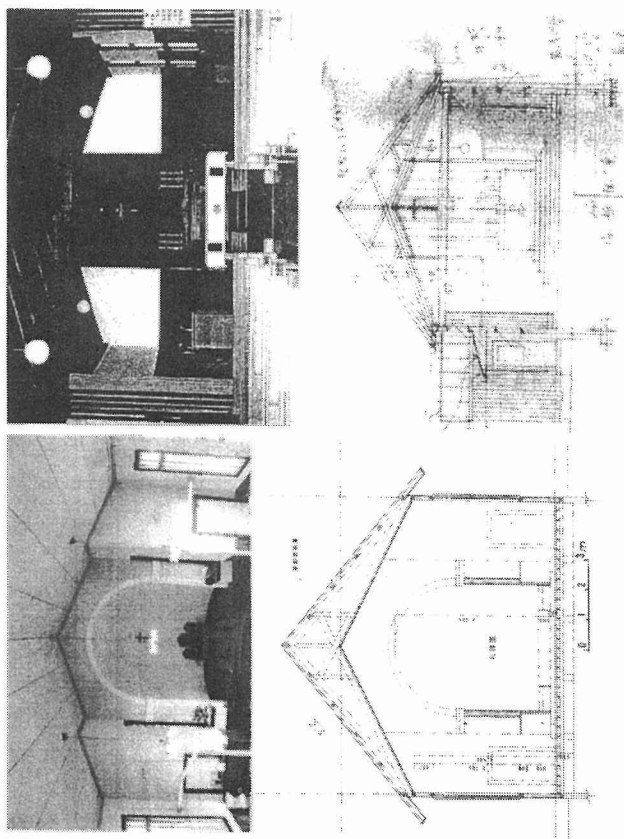
- (1) 当時の日本政治文化教育及キリスト教の代表的人物による結成、会長押川方義副会長本田庸一等キリスト教指導者含
- (2) 明治初期米国より宣教師として北海道に入り小樽、旭川、北見での宣教活動を実施昭和三年帰国
- (3) 日本建築学会大会学術講演梗概集 建築家元田稔研究 その1 (一九九三) ～その27 (二〇〇四) 参照
- (4) Early Indian Village Churches (1977)



写真 1 日本基督教会遠軽教会の
現教会建築 (正面形態)



現カナダ西海岸地方に建っていた教会の
礼拝室内部（上）と斜め梁交差部（左下）



元田稔設計の大森聖公会教会の
礼拝室内部（上）と断面小屋組図

図版 1 木造教会建築の礼拝室天井高確保の小屋組構造